『比較日本文化学研究』第 11 号（2018）

論　文

三島由紀夫文学の中国語訳とその受容について

張　　貴生
広島大学大学院文学研究科博士課程後期・広西大学副教授

On the Chinese translation of Mishima's literature and its acceptance

ZHANG Guisheng

Abstract: The Japanese writer Yukio Mishima's works have attracted the attention of Chinese readers since the *The Sea of Fertility* tetralogy was translated into Chinese in 1971. Although these books were translated for "internal reference" and "critique," their existence shows that literary researchers, Japanese literary translators, and readers in mainland China had begun to consider Mishima's literature. After reform developments and the opening up of China in the 1980s, additional works by Mishima began to be translated in China, which increased studies of Mishima and his literature. The translations and studies of Mishima's literature were performed from the cultural perspectives of different national ideologies, praise, or derogation. Mishima's process of growth as an author and studies and acceptance of his literature from initial political evaluations to evaluations of its literary value were tortuous and complex. What kind of man was Yukio Mishima? How were his literary works translated and disseminated in China? The great value of Mishima's literature can be shown by the significant spread of his literature in China based on the number of translated works.
Keywords: Yukio Mishima, literature, Chinese translation, acceptance

1. はじめに

日本文学の中国語訳は 20 世紀初頭に開始され、1980 年代の初めから 1987 年にかけて「日本文学ブーム」を迎えたと思われる。その要因としては中国の改革開放のため、社会、経済、文化などが高度発達の段階に入ったことがある。当然日本文学の翻訳も他の外国文学と同様に今まで未曾有の隆盛を極めている。中国の読者が日本から中国に入った物質以外、文化や文学にも強

い興味を示しているのである。そのブームに乗った中国の出版社も日本文学の翻訳作品を相次いで世に出した。多数の日本の名作が翻訳されていたが、日本国内外で注目された三島由紀夫の文学作品を見ることができなかった。ところが、1970 年に三島由紀夫が自決後、「政治的批判」のために、その代表作品である『豊饒の海』四部作が政治的伝達手段として中国で紹介され翻訳された。実際に三島由紀夫は自決という形で国民の覚醒を促し、軍国主義や日本天皇制の国家体制を復活させようとしたと思われている。当然、中国側は三島自殺事件による日本右翼勢力と軍国主義の台頭を警戒していると言える。そこで、1971 年から 1973 年にかけて「内部参考」と「批判用」として未公開発行で『豊饒の海』四部作の中国語訳が出版された。三島由紀夫の文学の翻訳や紹介は何故他の文学作品より遅れているのか、その原因は何であろうかという点について、中国における三島文学の翻訳とその受容のプロセスを探りたい。

2. 三島由紀夫論

2.1 三島由紀夫及びその文学

三島由紀夫は東京四谷区の生まれ、小説家であり、劇作家でもある。本名は平岡公威で祖父定太郎は樺太庁長官を務めた人で、父の梓は農林省官吏であった。母倭文重は元開成中学校長橋健三の次女であった。由紀夫の本名の公威は、祖父が同郷の恩人に当る男爵古市公威（土木工学者）にちなんで名付けたものだと言われている。なお大正 14 年（1925）生れということは、満年齢が昭和の年数と一致する。また、三島が第三の新人と同世代で、そのうえ吉本隆明より一つ年下、井上光晴より一つ年長である点も、この世代の戦争体験の質や三島の特異性を考えるうえで重要である。1921 年、学習院初等科に入学、1919 年に高等科を卒業するまで学習院に在籍した。初等科の頃から詩歌・俳句の習作を書いていたが、小説の処女作は学習院の「輔仁会雑誌」に発表した短編『酸模』（1938 年）であった。中学時代にはラディゲ『ドルジェル伯の舞踏会』、ワイルド『サロメ』、伊東静雄の詩などを愛読した。1941 年、国文学の師に当る清水文雄の推薦で『花ざかりの森』を『文芸文化』に連載し、このとき三島由紀夫という筆名を初めて用いた。この頃から、清水を通じて『文芸文化』の同人と接触し、『日本浪曼派』の間接的な影響を受けて文芸に親しんだ。翻訳文学から日本古典に至る読書の影響は、三島の作品

における近代的知性と伝統的美意識にそれぞれ対応していると思われる。1944年5月、徴兵検査をうけて第二乙に合格、同年10月に東大法学部法律学科に入学、勤労動員で中島飛行機小泉工場に勤務した。同時期に処女小説集『花ざかりの森』を刊行した。1945年2月に入隊検査をうけ、軍医の誤診のため即日帰郷、やがて神奈川県高座海軍工廠に動員された。そして敗戦を迎えた。8月15日の敗戦を三島文学の中に正確に位置づけるのは難しい。戦時中に書かれた短編は、軍国体制をこえた夢想に彩られている半面、滅びに共感する美意識が感じられる。三島にとって敗戦は終末感からの解放であると同時に、喪失とニヒリズムの時代の到来であった。同時代の文学者の多くが、旧秩序の拘束から解放されて、人間性の開花を求めていたのに比べて、三島の場合、『盗賊』(1948年刊) が情死を描いているように、ニヒリズムと死を媒介として虚構にエクスタシーを求める傾向のものが多い。1947年11月、東大法学部を卒業し、高等文官試験に合格して大蔵省に就職したが、1948年9月に退職し、作家生活に入る。川端康成に推されて文壇に登場し、初期習作の可能性を十分に活かした書き下ろし長編『仮面の告白』(1949年刊) で作家としての地位を確立、つづいて『愛の渇き』(1950年刊) を書き下ろし、『青の時代』(1950年) を連載、刊行した。後者は金融業光クラブの学生社長をモデルにしたもので、三島のモデル小説は『金閣寺』にもみられるように、反社会的行為に赴く“確信犯罪”者が多い。その後、『禁色』(1951～1953) など問題作も次々に発表した。透徹した方法論のもとに緻密な世界を築いたが、その作風は唯美主義から古典的均整を求める方向に移行し、『金閣寺』や『橋づくし』(1956) で一つの頂点に達した。『禁色』及びその第二部『秘楽』(1952～1953) を書く半面、1952年にはギリシアを旅行し、近代芸術の内面信仰に対して古代ギリシア人が「外面の均斉」を重く見たことに共感、ここから芸術の様式を重視する立場と肉体を鍛える試みとが生れ出る。この時期は三島の作品歴の内でも古典主義の色調の強い時期で、『真夏の死』(1952) 等の秀れた短編のほか、牧歌的ロマンスを均斉の取れた様式の中に描いた『潮騒』(1944年刊、新潮社文学賞) がある。そしてこの時期の頂点を示す作品が『金閣寺』(1956年刊。読売文学賞) であった。作者はこの作品について、「自分の気質を完全に利用」して「思想に晶化させ」る試みに成功したと述べている。つづいて『美徳のよろめき』(1957年刊) を書き、『現代小説は古典たり得るか』(1957) を連載した。

1958年6月、川端康成の媒酌で杉山寧の長女瑤子（当時、日本女子大英文科在学中）と結婚し、同年、大岡昇平、中村光夫らと季刊誌『声』の編集同人となり、『鏡子の家』の第1、2章を10月創刊号に発表、のち加筆して1968年に刊行した。この年、東京馬込の新居に転居した。ロココ調を生かしたこの家は、半ば三島の精神や美意識の延長と言い得る。『鏡子の家』で“戦後”への一つの決算を試みた後、1960年に60年安保の騒乱に接するに及んで、三島のうちにナショナルなものへの関心が芽生えた。短編『憂国』（1961）における二・二六事件の青年将校のイメージは、やがて『林房雄論』（1963）における昭和精神史の確認にまで発展した。

ここで劇作家としての活動をみると、初期作品『火宅』（1948）以後、『鹿鳴館』（1956）、『十日の菊』（1961）等多彩な展開を見せたが、特に注目されるのは『近代能楽集』（1956年刊）所収の作品で、能楽の枠組を蘇生させながらユニークな現代劇を展開した。これらの劇作上の美点が『サド侯爵夫人』（1965）に集約されている。

1960年以降の小説をみると、『宴のあと』（1960刊）は、そのモデルに当る有田八郎代議士からプライバシー侵害で告訴され、いわゆるプライバシー裁判として話題になった。続いて書き下ろし長編『午後の曳航』（1963刊）、長編『絹と明察』（1964刊）を経て、やがて『豊饒の海』四部作（1965～1970）に至った、輪廻転生による生れ変りを通じての四部作で、第一部『春の雪』は悲恋による男の死と女の出家、第二部『奔馬』は第一部の男の生れ変りが政治的実践者となり自決する。前者が“たおやめぶり”を後者が“ますらおぶり”を象徴する。第三部『暁の寺』は第二部の主人公の生れ変りがタイの王女として登場し、第四部『天人五衰』では四人目の生れ変りは贋物とわかり、輪廻転生の破綻した虚無に、老齢のワキ役の男は直面する。老年による衰弱が運命だとすれば、それに抗する自己完結が、作者の自決によるアイデンティティの確保だったとみることもできよう。

この時期は『憂国』を発端とするナショナリズムが昭和の歴史とともに作中において蘇生し、創作から行動へと表現範囲が広がった時期でもあった。『憂国』にみられるエロティシズムの契機は、三島が「エロティスムのニーチェ」と呼んだジョルジュ・バタイユの思想を媒介として、“死”によって至福に達する『葉隠』の美学への通路が開かれる。また戦後社会の甘えと風化とに対するアンチテーゼの意味をもって、『文化防衛論』（1969刊）における

文化天皇制の理念に至って、思想的に右傾し、独自の文化防衛論を説いていた。文学と行動との関係は『太陽と鉄』(1965～1968) のうちに理論化され、「不朽の花」を作る「文」に対して「花と散る」ことを目指す「武」が位置づけられ、独自の文武両道論が生れ出た。1967 年 4 月以来、自衛隊に体験入隊し、その時同行した学生たちと「楯の会」を結成した。1970 年 5 月、大学紛争当時の東大全共闘と討論を行い、11 月には東京池袋の西武百貨店で三島由紀夫展を開催、同月 25 日午前、「楯の会」の森田必勝らと共に自衛隊市ケ谷駐屯地で、自衛隊の決起を促したが果さず、総監室で割腹自決を遂げた。

三島自決後、1973～1976 年の間に新潮社によって『三島由紀夫全集』全 35 巻、補一巻が、1987 年に『三島由紀夫短篇全集』全二巻が刊行された。2000 年 11 月から 2005 年 08 月にかけて『決定版　三島由紀夫全集』全 42 巻（年譜・書誌を含む）が、『決定版　三島由紀夫全集補巻　補遺・索引』(2005 年 12 月）と『決定版　三島由紀夫全集別巻　映画「憂国」(DVD)』(2006 年 4 月）が新潮社から出版された。

このように、三島文学は他の作家と異なる作風を持っている。華麗な文体、特異な心理分析、古典的美に裏打ちされた作風で、小説・戯曲に美的探求を続けた。その主要作品は、レトリックを多様に使用しているところに特徴があり、構成なども緊密に組み立てられ、古代ギリシアの『ダフニスとクロエ』[1] から着想した『潮騒』、エウリピデスのギリシャ悲劇や、能楽・歌舞伎、ラシーヌのフランス古典劇などを下敷きにした戯曲や小説、『浜松中納言物語』を典拠とした『豊饒の海』など、古典から、その源泉を汲み上げ、新しく蘇らせようとする作風傾向がある。このような傾向から、その形式的な構成の表現方法は、近代日本文学の主な担い手だった私小説作家たちより、西洋文化圏の作家に近い面があると見られている。

また、社会的な事件や問題を題材にするなど、日本の第一次戦後派作家、第二次戦後派作家と共通する点はあったものの、その作風は彼らと違い、戦争時代への嫌悪はなく、社会進歩への期待や渇望、マルキシズムなシンパシーを持った未来幻想がなかったため、そういった面では、明日など信じていない太宰治、坂口安吾、石川淳、檀一雄などの無頼派に近い傾向がある。耽美的な傾向の点では江戸末期の文学の流れをくむ谷崎潤一郎、夭折美学や感覚的な鋭さの面では川端康成とも大きな共通性があるが、文体的には堀辰雄や森鴎外の影響を受けており、その文学の志向や苦闘は、日本的風土と西洋

理念との狭間で格闘した横光利一の精神に近いことが指摘されている[2]。

2.2 中国における三島文学への評価

三島文学は中国で翻訳されて以来、その文学作品を読む読者や三島文学を研究する学者が多くなった。三島文学への評価は研究者の立場や認識によって意見が分かれている。その中で三島文学の特異性や、三島文学の美学及び三島現象が注目されている。三島由紀夫文学の特性については、王向遠（2007）が次のように指摘している[3]。

三島由紀夫は生活においても創作においても非常に特異な作家である。…日本の敗戦、戦後及び憲法や民主主義制度の確立のため、天皇自身も「人間」であり、「神」ではなくなったと宣伝しているということは、三島にとっては納得も行かないし、戦争に敗れた日本社会に絶滅感や反抗心を強く持っている。彼はそういった極右思想の立場から文学の創作を始め、そして文壇に登場した。欧米でも翻訳・紹介された三島作品の多くが内容であれ人物であれ、読者には開いた口が塞がらぬほど怪異極まりに感じさせ、「不思議」な感じを与えられるという。男色性倒錯、同性愛、変態心理、殺人や放火、自殺や切腹、血飢え、破滅や死亡といった非常事件を題材とする三島は文学作品において右翼的ないし軍国主義の思想観念を表出するため、武士道精神を高揚し、ファシズムの旧軍人までも美化・謳歌している。三島由紀夫が自殺するのは自決という形で国民の覚醒を喚起し、軍国主義及び天皇制国家体制を復活させるということにある。それは日本国内でも大きな反響を起こして非常にマイナスな影響を齎した。当然ながら三島自決事件及びそれを伴う日本右翼勢力や軍国主義思潮の台頭により中国でも警戒されている。

戦後初期、三島の文学創作の動機は、「唯美主義の背後に天皇を中心とする日本主義の意識をまだ根強く潜在している」[4]。また、1960年代以後の創作について「政治的にも文学的にも情欲的な満足を追求するだけでなく、天皇制伝統観念への憧憬、精神的主柱―武士道精神の探求を示している」[5]。

「豊饒な海」四部作の一つである「春雪」の刊行後、他の三島文学作品が相次いで出版されており、1980年代後期から1990年代までの間、中国学術雑誌にも三島由紀夫の研究やその評論に関する文章が発表された。1995年に武漢で行われた三島由紀夫国際シンポジウムについて文潔若（1997）は次のよ

うに述べている[6]。

私は幸田露伴、泉鏡花、谷崎潤一郎、芥川龍之介、宮本百合子、五味川純平、三浦綾子、遠藤周作及び大江健三郎を紹介した時、日本軍国主義者が起こしたその不義の戦争に反対する作家のことを重点に書いたのである。……惜しいことに、民族感情をものにせず、1995年の秋に武漢大学で三島由紀夫国際シンポジウムを催すことを利用して、三島ブームを起こそうという人までもいる。その人たちは三島由紀夫が日本軍国主義復活を鼓吹する反動的な文人であることを忘れているようである。幸いに関係部門から阻止されて成り立たなかったのである。

以上で述べたように、三島の研究に代表される研究者はほとんど政治的デオロギーの立場に立って三島やその作品を評価しているのに対して文学自体の見地から客観的に見た三島の研究者もいる。葉渭渠（1994）は他の研究者の観点と違って政治の角度から三島を見ることに反対している。「“三島由紀夫現象”への解析」[7]において次のように指摘している。

三島由紀夫は1970年に自決後、その作品が政治的なキャリヤーとして「批判用」のために中国で紹介されてきた。あの特別な歴史時期では日本が軍国主義を「復活」していることを批判するため、当然政治的な激情を持った人々が三島自身とその行為を軍国主義の政治的な位置に固定しており、「憂国」や「奔馬」などへの批判にも広がった。三島事件も三十年ほど過ぎた90年代になった今日に至っても、あの定められた歴史時期の先入見で「軍国主義を復活しよう」とする三島を批判するし、「芸術形式を借用して自分の観点を宣伝」している人がいる。批判の対象として「金閣寺」や「春雪」にまで及んだ。前者は彼の軍国主義気分を反映していたのであり、後者は軍国主義の復活を鼓吹していたと思われたことに検討が必要である。

三島由紀夫への研究が深まるにつれて政治とは無関係に純学術の研究活動が行われるようになった。三島文学の価値への再認識が始まっていると言える。とりわけ、三島文学の美学についてさまざまな客観的な議論や的確な評価が見られた。主幹としての葉渭渠等によって編集された「三島由紀夫研究」（開明出版社、1996年）に三島への研究や評論に関する文章が掲載されているが、「三島由紀夫の精神構造と美学」（葉渭渠）、「三島由紀夫の美学的重層性」（唐月梅）、「三島由紀夫の創作と生活」（余華）、「三島の小説における変態心理とその根源」（王向遠）といった三島文学と「美学」の本質について論

述しているものが圧倒的に多い。文学の創作と生活との関係については、余華（1996）「美と醜、善と悪、生と死という全ての価値体系を混淆したばかりでなく、創作と生活を重ねてその境界線を混ぜ合わせた自分自身さえもそれが分からなくなったようだ」と指摘している。王向遠（1996）は「三島文学における変態心理は一般的頽廃主義でもないし、人に言われた“唯美主義”でもない。“戦後派”と思われたが、戦争に反対そしてそれを暴露した、平和や民主を期待する戦後派の作家たちとは正反対である。三島由紀夫の小説では道徳的堕落中にはっきりした理知を有し、唯美的頽廃中に強烈な、しかも反動的な信念と追求もある。小説中の人物の倒錯心理は戦後の歪んだ日本社会に対抗関係がある三島自身の芸術的投影とメタファーである。……三島文学の倒錯、虐待、血飢え及び死亡志向などといった変態心理は日本の伝統的武士道精神が現代社会に現れた歪な変化である」と述べている。また、隋玉林は「三島由紀夫と天皇制」（1996）の著述において「…総じていえば、歴史や文化の発展を阻止しようと企んだ、反動的な民族主義者と復古主義者である三島由紀夫文学の社会的な価値はゼロ以下だと言うしかない」と指摘している。

上述を見て分かるように、社会的価値の立場から三島由紀夫を評価していたのは三島に関する従来の持論にかかわっていると見られる。三島は、外国の軍隊は、決して日本の時間的国家の態様を守るものではないことを自覚するべきだとし、日本を全的に守る正しい健軍の本義を規定するためには、憲法9条全部を削除し、その代わり日本国軍を創立し、憲法に、「日本国軍隊は、天皇を中心とするわが国体、その歴史、伝統、文化を護持することを本義とし、国際社会の信倚と日本国民の信頼の上に健軍される」という文言を明記するべきであると主張している[8]。

また天皇論に関しては、三島は、「天皇の政治上の無答責は憲法上に明記されねばならない」とし、「軍事の最終的指揮権を天皇に帰属せしむべきでない」としている[9]。

実は、日本の歴史と文化の伝統の中心、祭祀国家の長である天皇は、国と民族の非分離の象徴で、その時間的連続性と空間的連続性の座標軸であると説く三島は、文化概念としての天皇という理念を説き、天皇は神聖でインパーソナルな存在であると主張している[10]。だから、中国においてよく取り上げられた天皇制や軍国主義の本質を見直すべきだと思う。

三島文学は中国でさまざまな評価が展開されており、意見も分かれているが、兎に角、三島の研究やそれに興味を示した人が増えてきたというのが事実である。

3. 中国おける三島文学の受容及びその主要な翻訳作品

1971年から1973年にかけて三島由紀夫の作品における「豊饒なる海」四部作—「春の雪」、「奔馬」、「暁の寺」、「天人五衰」—の中国語訳が「内部参考」と「批判用」として人民文学出版社によって出版された。それ以後十何年にわたって三島文学作品の翻訳は安全に停止された。1985年になって中央関係部門の許可を得て、「春の雪」の訳本が中国文聯出版社によって一般公開で刊行された。翻訳の動機については唐月梅（1985）は「三島作品を翻訳したといってもその政治的、文芸的観点に賛同するわけではない。同じようにそういった観点を批判していても、その全ての創作を否定する意味はない。われわれは作家とその作品に是是非非の態度で臨んで具体的分析をしなければならない」と主張している。このように中国改革の深まりや思想の開放にしたがって、三島への認識は政治的イデオロギーに止まらず、上げられたその文学的業績も注目されてきた。翻訳を通じて、中国の読者自身に作家の三島を理解、認識、弁別させて、それ以後、三島文学の翻訳作品が次々と刊行されるようになった。1987年に北京の作家出版社によって「愛の渇き」（金溟若訳）[11]が出版された。1988年に北京の工人出版社（現在中国工人出版社）によって発行された「世界著名文学賞受賞者文庫」における「日本巻」に「金閣寺」（焦同仁、李征訳）が収められた。1990年に中国友誼出版公司によって「春の雪・天人五衰」（文潔若、李芒、文静訳）が刊行された。1991年に中国社会科学院外国文学研究所で刊行された「世界文学」（第1回）の「日本作家三島由紀夫特集」に唐月梅、許金龍等によって訳された短編小説5篇が掲載された。1994年に北京外国語大学によって発刊された「外国文学」にも「三島由紀夫特集」の欄が設立され、「憂国」などの中国語訳が掲載された。

1994年から1995年にかけて、作家出版社に空前と言えるほどの大規模な「三島由紀夫文学シリーズ」（千葉宣一顧問、葉渭渠主幹、唐月梅副主幹）が十一巻に分かれて刊行された。その中には長編小説もあれば短編小説や近代能楽や歌舞伎集もある。「仮面の告白・潮騒」、「金閣寺」、「春の雪」（以上唐月梅訳）；「愛の渇き・午後の曳航」、「奔馬」（以上許金龍訳）；「暁の寺」（劉

光宇、徐秉潔訳)、「天人五衰」(林少華訳)、「憂国・真夏の死」(短編集、許金龍等訳)、「弓月奇譚」(申非、許金龍訳)、「アポロの杯」(散文随筆集、申非、林青華訳)

以上で翻訳された作品は政治的イデオロギーの影響で出版された文学シリーズが発禁されてしまったが、1988年になってはじめて本シリーズが公開発行され、国家図書館で所蔵を始められたのである。1991年1月に中国文聯出版社によって刊行された「三島由紀夫小説集」(葉渭渠主幹)は三巻から構成されている。小説集には長編小説の「禁色」(巻一、楊柄辰訳)、中編小説「心の渇き」(巻二、楊柄辰訳)、長編小説の「鏡子の家」(巻三、楊偉訳)が収録されている。これは「三島由紀夫文学シリーズ」の続編だと思われる。その後、同じ中国文聯出版社によって出版された「三島由紀夫作品集」(葉渭渠、唐月梅主幹)が世に送られた。旧訳の作品のほかに、新訳の長編小説や散文随筆集も見られた。「肉体学校」、「幸福号の出航」、「純白の夜」、「盗賊」のような長編や、「残酷の美」、「太陽と鉄」などのような散文随筆集が作品集に収められた。こうして三島文学作品の代表作が殆ど中国語に訳出されたと言えよう。

三島由紀夫の文学作品の受容については、賛否両論もあるが、中国語訳の状況から見れば、かなり中国の読者の目線が集まっているようである。事実上、三島由紀夫の作品は中国で若者の受けがよいと思われる。以前政治的イデオロギーや三島事件が重視されたのに対して、比喩多用のような三島の文学創作手法や作風、その文学のリアリティーや美学というものが、時下中国大学生に注目されているのだと思う。下記(図表を参照)の中国語訳の作品数(重訳や同一作品の再版を含む)を見れば分かるように、少なくとも三島とその文学作品を研究している者が結構存在することが伺えた。その存在自体は戦後日本文学の研究にとって意味深いと思う。

4. 結語

本稿では三島の成長とその文学や、文学の道を歩んできた過程及びその格別の作風を帯びた作品の中国語訳と中国における受容を述べた。三島に関する研究分野はもっと幅広く拡大することが必要であると思う。三島文学作品に関しては、近年来、その創作の人工性がしばしば指摘されている。また、三島は小説家か戯作家かという議論も各研究者の間にも展開されているし、

三島小説に出てきた名言も研究対象となる傾向も見られている。今後政治的イデオロギーの障壁を越え、純文学の見地で三島文学を広い視野で研究されたい。未訳の三島の文学作品はさらにより多く中国に紹介されることを期待している。

注

[1] 原題（ギリシヤ）Poimenika kata Daphnin kai Chloēn

牧歌的小説。古代ギリシャの作家ロンゴスにより二～三世紀頃書かれた。レスボス島を舞台に羊飼いの少年ダフニスとその恋人クロエをめぐる物語。ラベルによる同名のバレエ音楽が知られる。

[2] 神谷忠孝「横光利一」（旧事典 1976）。

[3] 原文中国語、筆者訳。

[4]「春雪」訳本の前言、唐月梅訳著、中国文聯出版社公司、1985 年。原文中国語、筆者訳。

[5] 同上。

[6]「文学因縁」（序文）、文潔若編、湖南人民出版社、1997 年。原文日本語、筆者訳。

[7]「外国文学」北京外国大学、1994 年 02 期。原文日本語、筆者訳。

[8]「問題提起（二）戦争の放棄」（憲法改正草案研究会配布資料、1970 年 7 月）。

[9]「問題提起（一）新憲法における『日本』の欠落」（憲法改正草案研究会配布資料、1970 年 5 月）。

[10]「文化防衛論」（中央公論 1968 年 7 月号）。

[11] 台湾志文出版社、1971 年初訳。

参考文献

(1) 王向遠「日本文学漢訳史」著作集第 3 巻　寧夏人民出版社　2007 年 08 月

(2) 余　華「三島由紀夫的写作与生活」作家　1996 年 02 期

(3) 王向遠「三島由紀夫小説中的変態心理及其根源」北京師範大学学報　1991 年 04 期

(4) 島内省二「豊饒の海へ注ぐ　三島由紀夫」ミネルヴァ書房〈ミネルヴァ日本評伝選〉 2010 年 12 月

(5) 葉渭渠「三島由紀夫研究」開明出版社　1996 年

(6) 小林秀雄（三島由紀夫との対談）「美のかたち――『金閣寺』をめぐって」文藝 1957 年 1 月号 39 巻　2004

(7) 青海健「三島由紀夫の帰還――青海健評論集」小沢書店　2000 年 1 月

(8) 康東元「日本近・現代文学の中国語訳総覧」勉誠出版　2006 年 01 月 20 日

翻訳作品	日本語作品	訳者	中国出版社	翻訳時期
《潮骚》	「潮騒」	刘慕沙	阿波罗出版社	1970 年初版
		郑秀美	星光出版社	1984 年初版（双子星丛书系列）
		张碧玲	金枫出版社	1991 年初版
		刘慕沙	远流出版社	1991 年初版
			花田出版社	1995 年初版（日本经典文学大系系列）张蓉蓓导读
		郑秀美	星光出版社	1994 年初版（日本经典名著系列）
		石榴红文字工作坊翻译／张蓉蓓导读	万象图书	1997 年初版（三岛由纪夫精选系列）
		唐月梅	木马出版社	2003 年初版（三岛由纪夫文集系列）
《永恒的春天》	「永すぎた春」	訳者未詳	正义出版社	1985 年初版（此版本名字译为《漫长的春天》）
		严桂兰	星光出版社	1985 年初版（双子星丛书系列）
		严桂兰	星光出版社	1996 年初版（日本经典名著系列）
《忧国》	「憂国」	陈千武	巨人出版社	1970 年初版
		刘慕沙	三三书坊	1980 年初版（此版本和《潮骚》合译，书名为《忧国・潮骚》）
《幸福号起航》		刘华亭	星光出版社	1986 年初版（双子星丛书系列）
《美丽的星》	「美しい星」	郑秀美		1985 年初版（双子星丛书系列）
《奔马》	「奔馬」	邱梦蕾	星光出版社	1983 年初版（双子星丛书系列）
		邱梦蕾	星光出版社	1994 年初版（日本经典名著系列）
		许金龙	木马文化	2002 年初版
《晓寺》	「暁の寺」	邱梦蕾	星光出版社	1983 年初版（双子星丛书系列）
		邱梦蕾	星光出版社	1994 年初版（日本经典名著系列）
		刘光宇、徐秉洁	木马文化	2002 年初版
《天人五衰》	「天人五衰」	余阿勋	晨钟出版社	1971 年初版
		余阿勋	星光出版社	1984 年初版（双子星丛书系列）
		邱梦蕾	星光出版社	1994 年初版（日本经典名著系列）
		林少华	木马文化	2002 年初版
《禁色》	「禁色」	郑秀美	星光出版社	1986 年初版（双子星丛书系列）
		林永福导读	久大文化	1993 年初版
		林永福导读	花田文化	1995 年初版（日本经典文学大系系列）
		石榴红文字工作坊翻译／林永福导读	万象图书	1997 年初版（三岛由纪夫精选集系列）
		郑秀美	星光出版社	1999 年初版（日本经典名著系列）
		杨炳辰	木马文化	2002 年初版（三岛由纪夫文集系列）
《女神》	「女神」	刘华亭	星光出版社	1987 年初版
		罗凤书	大嘉出版社	1988 年初版（石榴红系列）
		张蓉蓓导读	花田出版社	1995 年初版（日本经典文学大系系列）
		石榴红文字工作坊翻译／张蓉蓓导读	万象图书	1997 年初版（三岛由纪夫精选集系列）
《太阳与铁》	「太陽と鉄」	钟肇政中译贝斯特英译	林白出版社	1972 年初版（此版本为中英对照）
		刘华亭	星光出版社	1986 年初版
《肉体学校》	「肉体学校」	郑建元	星光出版社	1996 年初版（日本经典名著系列）

翻訳作品	日本語作品	訳者	中国出版社	翻訳時期
《性命出售》	「命売ります」	刘慕沙	三三书坊	1982 年初版
《音乐》	「音楽」	庄静静	新潮社	1988 年初版
《悲沉瀑布》	「沈める滝」	訳者未詳	新潮社	1991 年初版
《假面的告白》	「仮面の告白」	张良泽	晨钟出版社	1970 年初版
		刘华亭	星光出版社	1984 年初版（双子星丛书系列）
		罗凤书	大嘉出版社	1988 年初版（石榴红系列）
		李永炽导读	久大文化	1991 年初版
		刘华亭	星光出版社	1994 年初版（日本经典名著系列）
		李永炽导读	花田出版社	1995 年初版（日本经典文学大系）
		石榴红文字工作坊翻译 / 李永炽导读	万象图书	1997 年初版（三岛由纪夫精选系列）
		唐月梅	木马文化	2002 年初版（三岛由纪夫文集系列）
《夏子的冒险》	「夏子の冒険」	郑凯	大嘉出版社	1988 年初版（石榴红系列）
		张蓉蓓导读	久大文化	1991 年初版
		张蓉蓓导读	花田文化	1995 年初版（日本经典文学大系系列）
		石榴红文字工作坊翻译 / 张蓉蓓导读	万象图书	1997 年初版（三岛由纪夫精选集系列）
《兽之戏》	「獣の戯れ」	黄琼代	大嘉出版社	1988 年初版（石榴红系列）
		张蓉蓓导读	久大文化出版社	1991 年初版
		石榴红文字工作坊翻译 / 张蓉蓓导读	万象图书	1997 年初版（三岛由纪夫精选集系列）
《三岛由纪夫短篇杰作选》	「三島由紀夫短編傑作選」	余阿勋等	现代潮出版社	1970 年初版
		余阿勋 黄玉燕	志文出版社	1985 年初版（新潮文库系列）
《仲夏之死》	「真夏の死」	刘慕沙	皇冠出版社	1970 年初版
《镜子之家》	「鏡子の家」	杜忆凡	星光出版社	1987 年（双子星丛书系列）
《繁花盛开的森林》	「花ざかりの森」	梁惠珠	星光出版社	1986 年初版（双子星丛书系列）
《水中月》	「水中の月」	刘华亭	星光出版社	1986 年初版（双子星丛书系列）
短篇集《忧国》鲜花盛时的森林 / 忧国 / 剑 / 拉迪盖之死	短編集「憂国」－花ざかりの森／憂国／剣／ラディゲの死	许金龙	浙江文艺出版社	2011 年
《爱的饥渴》	「愛の渇き」	邱素臻	水牛出版社	1970 年初版（水牛文库系列）
		金溟若	志文出版社	1971 年初版
		訳者未詳	正义出版社	1975 年初版（此版本译为《爱的渴求》）
		游瑞华	星光出版社	1985 年初版（双子星丛书系列）
		钟肇政导读	久大文化	1989 年初版
		游瑞华 竺祖慈	星光出版社	1994 年初版（日本日本经典名著系列）
		钟肇政导读	花田文化	1995 年初版（日本经典文学大系系列）
		石榴红文字工作坊翻译 / 钟肇政导读	万象图书	1997 年初版（三岛由纪夫精选集系列）
		唐月梅	木马文化	2002 年初版（三岛由纪夫文集系列）

翻訳作品	日本語作品	訳者	中国出版社	翻訳時期
《不道德教育讲座》	「不道徳教育講座」	陈玲芳	星光出版社	1986 年初版（双子星丛书系列）
		陈玲芳	星光出版社	1994 年初版（日本经典名著系列）
		邱振瑞	大牌出版社	2012 年初版
《盗贼》	「盗賊」	刘华亭	星光出版社	1985 年初版（双子星丛书系列）
		？同上かも（要調査）	正义出版社	1985 年初版
《纯白的夜》	「純白の夜」	郑秀美	星光出版社	1996 年初版（日本经典文学系列）
《文章读本》	「文章読本」	黄毓婷	木马文化	2010 年初版
《丰饶之海》四部曲《春雪》	「豊饒の海」の四部作「春の雪」	余阿勋	青年出版社	1969 年初版
		余阿勋	星光出版社	1974 年初版（双子星丛书系列）
		邱梦蕾	星光出版社	1994 年初版（日本经典名著系列）
		唐月梅	木马文化	2002 年初版
丰饶之海四部曲套书	「豊饒の海」四部作	唐月梅等翻译（本套书采用的是国内翻译者译本）	木马文化	2002 年初版
三岛传记类译本《壮烈的切腹人》		约翰・南生著 陈吟香译	金陵图书出版	1979 年初版（此书的前半部是约翰・南生写的三岛传记，后半部以各种三岛的资料集合为附录，包括他身前死后各界人士对他的评论、自杀后的新闻报道、还附了钟肇政翻译的《忧国》、余阿勋在三岛家对他本人的采访记录以及 93 帧三岛的照片，资料丰富详实。）
《三岛由纪夫》（名人伟人传记全集 63）	「三島由紀夫」（名人偉人伝記全集 63）	大直敬节著 陈熙桢译	名人出版事业	1982 年初版
《梦幻武士三岛由纪夫》		纪翰・纳桑著 梁翠凌译	北辰文化	1988 年初版
《金阁寺》	「金閣寺」	张良泽 钟肇政	晚蝉书局	1969 年 12 月初版
		陈孟鸿	志文出版社	1971 年初版（新潮文库系列）
		张良泽 钟肇政	大地出版社	1976 年初版此版本是依据晚蝉书局所出的单行本重新修订校正后出的版本）
		刘华亭	星光出版社	1983 年初版（双子星丛书系列）
		李永炽 导读	久大文化	1989 年初版
		郑皮耶	龙和出版	1991 年初版
		刘华亭	星光出版社	1994 年初版（日本经典名著系列）
		李永炽 导读	花田文化	1995 年初版（日本经典文学大系）
		石榴红文字工作坊翻译／李永炽导读	万象图书	1997 年初版（三岛由纪夫精选集系列）
		唐月梅	木马文化	2002 年出版（三岛由纪夫文集系列）
		林少华	青岛出版社	
《美德的徘徊》	「美徳のよろめき」	刘慕沙	巨人出版社	1971 年出版（此版译为《美德的动摇》）
		訳者未詳	新潮社	1991 年初版（此版本翻译为《美德的背叛》）
		杨炳辰	木马出版社	2002 年初版（三岛由纪夫文集系列 此版译为《美德的徘徊》）

翻訳作品	日本語作品	訳者	中国出版社	翻訳時期
《午后曳航》	「午後の曳航」	黄也白	领导出版社	1979 年初版
		訳者未詳	正义出版社	1985 年初版
		刘华亭	星光出版社	1986 年初版（双子星丛书系列）
		庄静静	新潮社	1989 年初版
		钟肇政导读	久大文化	1989 年初版
		刘华亭	星光出版社	1993 年初版（日本经典名著系列）
		钟肇政导读	花田文化	1995 年初版（日本经典文学大系系列）
		石榴红文字工作坊翻译 / 钟肇政导读	万象图书	1999 年初版（三岛由纪夫精选集系列）
		许金龙	浙江文艺出版社	2010 年
《宴之后》	「宴のあと」	郑凯	大嘉出版社	1988 年初版（石榴红系列）
		黄临芳导读	久大出版社	1994 年初版
		罗凤书	万象图书	1994 年初版
		石榴红文字工作坊翻译 / 黄临芳导读）	万象图书	1997 年初版（三岛由纪夫精选集系列）
《蓝色时代》	「青の時代」	林永福导读	久大文化	1990 年初版
		李永织导读	花田文化	1995 年初版（日本经典文学大系系列）
		石榴红文字工作坊翻译 / 林永福导读	万象图书	1997 年初版（三岛由纪夫精选集系列）
《孔雀 日本近现代文学选集》		林永福	世茂出版社	1986 年初版
《三岛由纪夫・川端康成往复书简》	「川端康成・三島由紀夫往復書簡」	陈宝莲	麦田出版社	2000 年初版
《近代能乐集》	「近代能楽集」	许金龙 申非	木马文化	2002 年初版

图表　三島文学漢訳の代表作